



岐阜県新発見考古速報 2022

—令和4年度岐阜県発掘調査報告会 発表資料—



各務原市 坊の塚古墳 上空からの写真

日時 令和4年10月22日(土) 13:15~15:45

会場 岐阜県図書館 多目的ホール

主催 岐阜県文化財保護センター

共催 岐阜県図書館

日程

12:45～13:15	受付	
13:15～13:20	開会挨拶	
	岐阜県文化財保護センター所長	
13:20～14:00	事例発表Ⅰ 各務原市：坊 <small>ぼうのつかこふん</small> の塚古墳	
	各務原市教育委員会事務局文化財課	西村 勝広 氏
14:05～14:45	事例発表Ⅱ 関市：小洞 <small>こぼらこふんぐん</small> 古墳群	
	岐阜県文化財保護センター	日置 真穂
14:45～15:00	休憩・遺物見学	
15:00～15:40	事例発表Ⅲ 関市：古町 <small>ふるまちいせき</small> 遺跡	
	関市文化財保護センター	伊藤 聡 氏
15:40～15:45	事務連絡	

資料目次

坊の塚古墳 第1～6次発掘調査について	1
小洞古墳群の調査	5
関鍛冶発祥の地・古町遺跡	9
令和3年度岐阜県埋蔵文化財発掘調査実施一覧	14

清流の国ぎふ憲章

～ 豊かな森と清き水 世界に誇れる我が清流の国 ～

「清流の国ぎふ」に生きる私たちは、

知 清流がもたらした自然、歴史、伝統、文化、技を知り学びます

創 ふるさとの宝ものを磨き活かし、新たな創造と発信に努めます

伝 清流の恵みを新たな世代へと守り伝えます

平成26年1月31日 「清流の国ぎふ」づくり推進県民会議

坊の塚古墳 第1～6次発掘調査について

各務原市教育員会事務局文化財課 西村

所在地 各務原市鶴沼羽場町5丁目26番地外

種別 前方後円墳（県史跡 墳長120m 三段築成 竪穴式石室 円筒埴輪列）

築造時期 4世紀後葉

調査の経緯

平成26年（2014）、地元の土地共有財産管理組合が今後の適切な保存・管理・活用を条件として各務原市へ寄付。

平成27年度（2015）、実施計画「坊の塚古墳発掘調査整備事業」が立ち上がる。

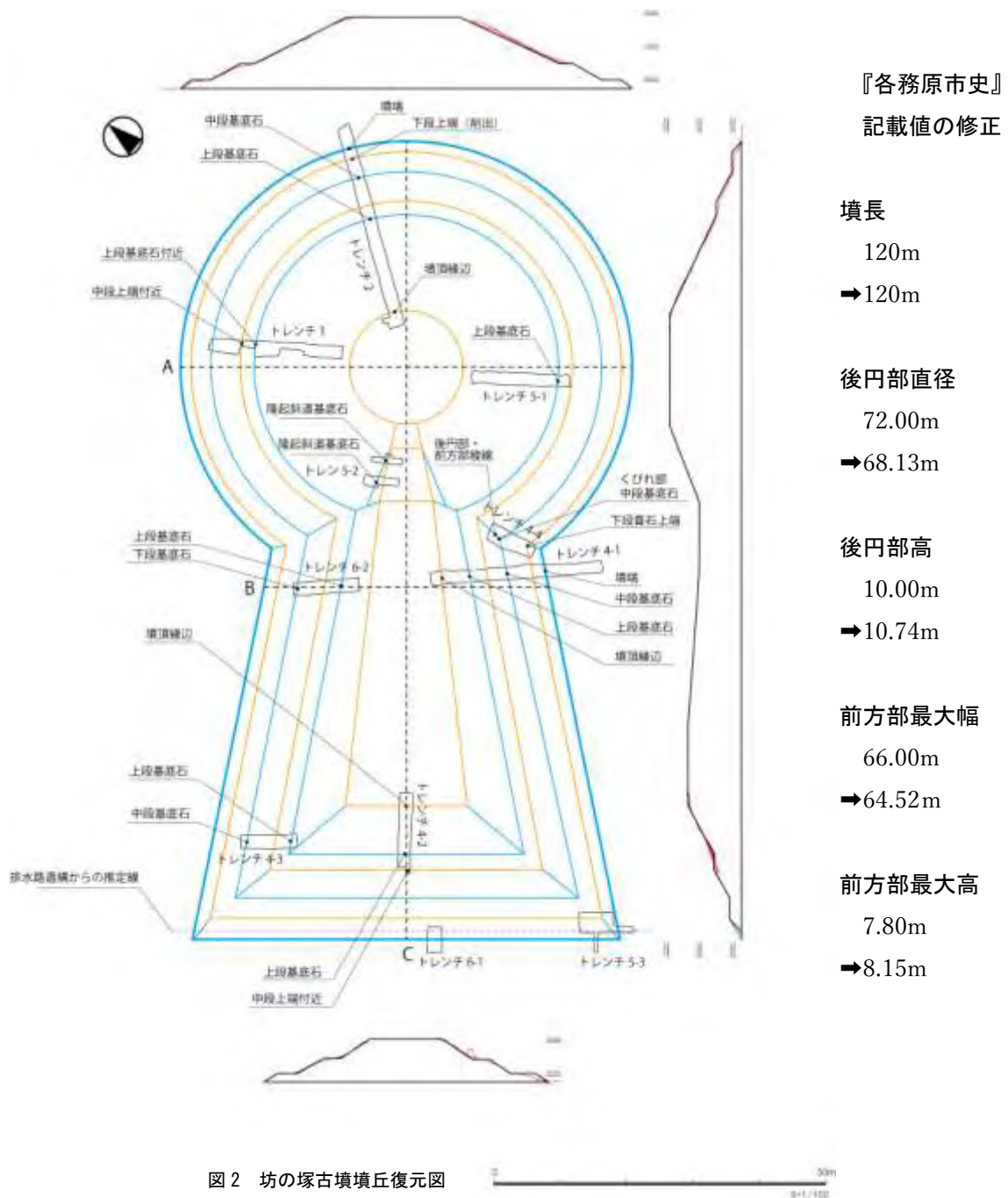
- ・第1次発掘調査 平成27年度 トレンチ1（後円部法面）
- ・第2次発掘調査 平成28年度 トレンチ2（後円部法面から墳端）
- ・第3次発掘調査 平成29年度 トレンチ3（主体部の盗掘坑）
- ・第4次発掘調査 平成30年度 トレンチ4-1（前方部法面から周壕・周壕）
トレンチ4-2（前方部法面） トレンチ4-3（前方部法面） トレンチ4-4（括れ部法面）
- ・第5次発掘調査 令和元年度 トレンチ5-1（後円部法面） トレンチ5-2（隆起斜道）
トレンチ5-3（前方部削平箇所）
- ・レーダー探査 令和2年度
- ・第6次発掘調査 令和3年度 トレンチ6-1（前方部法面） トレンチ6-2（前方部墳端付近）



図1 坊の塚古墳の周辺図
（現況墳丘と推定周壕）

調査の成果（墳丘形状と規模）

- ・墳丘は三段築成で、上段、中段、下段ともに葺石を施工（チャートが100%）。
- ・墳丘上段と中段については、葺石面（墳丘斜面）の上部は崩れているが、下端に大きな基底石がはめ込まれているため下部は完全な状態で残存。
- ・墳丘下段の葺石は、滑落している部分と現状維持の部分を確認。
- ・円筒埴輪列の存在により、墳頂の縁辺が特定。
- ・各トレンチの成果を基に、墳丘が左右対称形であることを前提に復元。
- ・前方部の墳端については、発掘の成果と墳丘主軸断面の傾斜角度から推定。



調査の成果（竪穴式石室）

- ・盗掘により完全に破壊。盗掘の時期は、中世末～近世初頭と明治30年代。
- ・主要な副葬品は行方不明で、明治期の盗掘と今回の発掘調査で出土した滑石製模造品（勾玉・管玉・白玉・刀子形・斧形）と鉄製品の断片のみが確認。
- ・確認された天井石は5枚。最大で長軸2.85m、短軸1.38m、厚さ17.3cm、推定重量2t以上。全て盗掘時に動かされた状態で遺存。
- ・天井石を支えていた側壁材（板状の石）も、盗掘により散乱。
- ・石室は後円部の軸に沿うが、前方部側へ寄った位置に構築。墓壙の側面は一段で、全長約6.3m、幅約4.8mと推定。石室は全長5m、幅1mと推定。

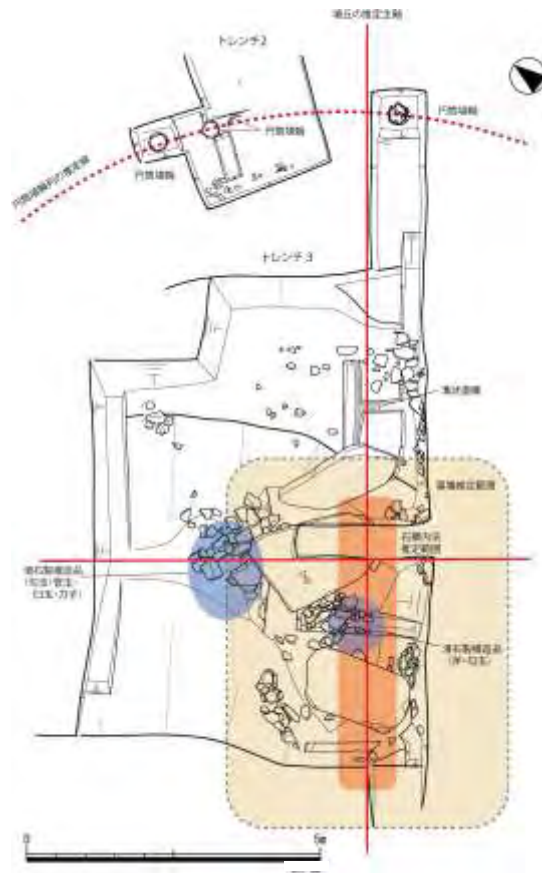


図3 坊の塚古墳の墓壙と石室の推定

調査の成果（墳頂祭祀）

- ・墳頂と隆起斜道の外縁には円筒埴輪が配列。一部に朝顔形埴輪を含む。埴輪の直径は30cm前後、配置の間隔は中心間で約50cm。墳頂以外には配置しない（市域では唯一の円筒埴輪列を有する）。
- ・円筒埴輪は胎土や整形の違いで二系統に分類されるが、いずれも同一形態の埴輪製作を意図したとみなせる。
- ・後円部に限って小形の壺形土器が出土したため、円筒埴輪の内側に壺形土器を配置していた様子が推定される。
- ・食物形土製品（魚・餅・アケビ）が、供物として使用された。
- ・盗掘の影響を受けていない墳頂部からも、滑石製の白玉が多量に出土したため、墳頂祭祀に関わるものと推定される。
- ・壺や滑石製品が用いられる点は、在地色ととらえられる。

調査の成果（周壕）

- ・周壕の掘削深度は、黒色土、ローム層、木曾川泥流堆積物を突破し、各務原層（砂層）に達している。墳丘下段のほとんどは、この際の削り出し部分。
- ・試掘調査の結果を総合して、盾形の周壕が墳丘を取り巻いていると推定される。

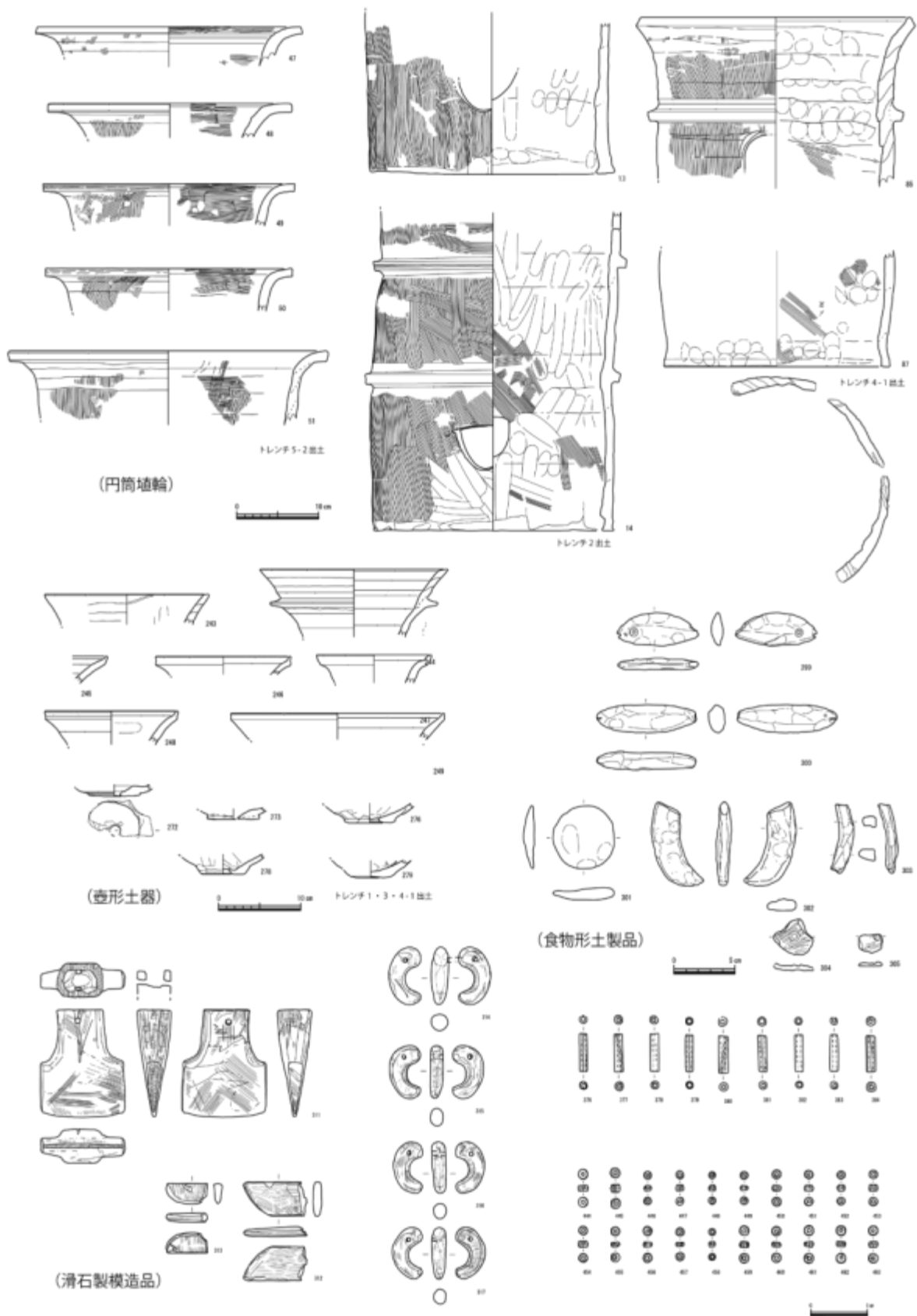


図4 坊の塚古墳発掘調査出土遺物

小洞古墳群の調査

岐阜県文化財保護センター

1 はじめに

当遺跡は、関市広見字小洞に所在し、長良川とその右支川である武儀川に挟まれた盆地南部の標高約 100m の丘陵南斜面に立地します。遺跡のある広見地区は、多数の古墳が集中して分布する地域です。また、当遺跡の東 2.5km には、伝統的な地方豪族であるムゲツ氏の氏寺跡である弥勒寺跡を中心に、古代の武義郡の役所跡である弥勒寺官衙遺跡群が所在します。また、各河川により開けた場所には条里遺構が多数確認されており、古墳時代以降、美濃国内でも特に活発に土地利用がなされた地域であるといえます。

今回の発掘調査は、東海環状自動車道（大野神戸 IC～関広見 IC）の建設に先立ち、平成 27 年 5～12 月に 2,629 m² を対象に実施しました。調査の結果、以前から知られていた 8 基の古墳の他、小規模な 2 基の古墳（9・10 号古墳）と、1 基の土坑墓を新たに確認することができました。また、発掘調査で見つかった遺物から、当遺跡は 6 世紀後葉～7 世紀初頭に造営された古墳群であることが分かりました。

2 調査の成果

①調査で見つかった遺構・遺物について

発掘調査で確認した古墳はすべて円墳で、直径 8～10m の中規模古墳と、直径約 5 m と想定される小規模古墳があります。今回の調査では、各古墳の墳丘の一部とその周りを巡る周溝を確認したほか、中規模古墳の 2・4 号古墳と小規模古墳の 9・10 号古墳の横穴式石室の調査を行いました。

古墳について 小洞古墳群は丘陵の裾部に位置するため、傾斜のある地形を平らに造成したのち、石材を積んで横穴式石室を造り、最後に石室に土をかぶせて墳丘を成形します。2・4 号古墳は、ともに両袖式の横穴式石室を有します。2 号古墳の石室は、全長 6.12m、玄室（被葬者を埋葬する部屋）の大きさは 2.88m×0.98m です。4 号古墳の石室は、全長 8.28m、玄室の大きさは 3.24m×1.52m です。どちらの石室も、初めに奥壁（玄室の一番奥の壁）の最下段の石材を置き、その石材の高さまで側壁（玄室の両側の壁）を一段ずつ積み、さらにその上部に石材を一段ずつ積んでいます。石室の天井部分にあたる石材は見つかりませんでした。石室は、玄室の中央が緩やかに胴を張り（外側にふくらむ）、玄室と羨道の境を区切る立柱石が見られるという 6 世紀後葉頃の特徴を有します。一方、9・10 号古墳は、墳丘が低く表土に埋もれてしまっていたため、調査前の地表面ではその存在を確認されていませんでした。墳丘はほとんど確認できず、石室も南部が崩れてしまっていたが、周溝を有し石室石材の横目地を確認できるなど、古墳の規模が小さいながらも 2・4 号古墳の構築方法と類似することがわかりました。石室の大きさは、9 号古墳が残存部の全長 2.7m、幅 0.75m、10 号古墳が残存部の全長 1.62m、幅 0.63m です。残存部から、両古墳はほぼ同じ大きさであったと考えられます。9 号古墳の玄室の大きさを 4 号古墳と比較すると、およそ 3 分の 1 程度の大きさで、大人 1 人分を埋葬できる程度の大きさです。

遺物について 石室には埋葬される被葬者ととも副葬品が入れますが、今回の調査で石室の中から見つかった遺物は少量でいずれも小破片でした。2号古墳の石室内からは、7世紀代の須恵器の小鉢や銅製の耳環（環状の耳飾り）の芯部が出土しました。石室の形は6世紀後葉頃の特徴を持っているため、古墳が造られた時期と、石室内から出土した遺物に僅かな時期差が見られることとなります。このことから、今回出土した遺物は、追葬（同じ古墳に家族などの別の人物を埋葬すること）の際に石室内に祀られたものである可能性があります。一方、4号古墳の石室からは、TK209型式の長頸壺や美濃須衛産Ⅱ期後半の平瓶（ともに6世紀末）といった2号古墳よりもやや古手の土器と、玉や刀子などの遺物が出土しました。9号古墳からは須恵器の小破片が出土し、10号古墳からは遺物は出土しませんでした。

土坑墓について 古墳以外には、地面を掘り窪めた穴に遺体を埋葬した土坑墓（ST1）を1基確認しました。ST1は長さ3.04m、幅約0.8mの隅丸方形で、短辺両側に小穴を確認しました。小穴は何のために掘られたものなのか詳細は不明です。横穴式石室の長軸が南北方向に築かれたのに対し、ST1の長軸は東西方向を向いています。ST1からは、副葬品と考えられる銅芯銀張の耳環が出土しました。

②古墳の位置関係について

小洞古墳群は丘陵裾の斜面に立地し、地形に沿ってほぼ横一列に並んでいます（1・8号古墳は発掘区の北東約170mに所在）。今回の調査により、周溝の重複関係から4号古墳→2号古墳→10号古墳、3号古墳→5号古墳という順番で築造されたことが明らかになりました。また、石室の形態や造りが近似していることや、石室内から出土した遺物にあまり時期差が見られないことから、非常に短い期間内に連続して古墳が築造されたと思われます。

また、列のほぼ中央にあたる3号古墳と7号古墳の間がやや広く、古墳が重ならない空白地となっています。このことから、今回調査を行った範囲に並ぶ古墳は、東側の4・2・7・10号古墳、西側の3・5・6・9号古墳の2つのグループに分かれる可能性があります。両グループは、少なくとも中規模古墳3基と小規模古墳1基のほぼ同じ構成から成ります。また、土坑墓ST1は9号古墳の南西約5mの場所にあり、西側のグループに所属すると思われます。

古墳は、地山の造成や石室の構築、墳丘の盛土といったいくつもの手間をかけて作られる墓ですが、土坑墓は地面に掘った穴に遺体を埋葬するという単純な造りの墓です。同じ古墳群中に埋葬形態の異なる土坑墓を採用するのは、埋葬された被葬者の生前の身分を示していると考えられます。さらに、古墳の大きさにも差をもたせていることから、土坑墓→小規模古墳→中規模古墳の順に被葬者の身分が高かったと推測されます。東・西グループの古墳と土坑墓の組合せから、小洞古墳群を営んだ集団には、対等な力関係にあった2つのグループが存在する集団であったことが推測されます。

3 まとめ

古墳の大きさや位置関係は、そこに埋葬される人物の生前の身分が反映されていると考えられます。今回の発掘調査では、中規模古墳以外に小規模古墳や土坑墓が見つかり、被葬者の生前の階層差が古墳の大きさや埋葬される墓の形態に示されていることが明らかになりました。また、古墳を造営した集団には少なくとも2つの対等な力関係のグループが存在した可能性があることが分かりました。

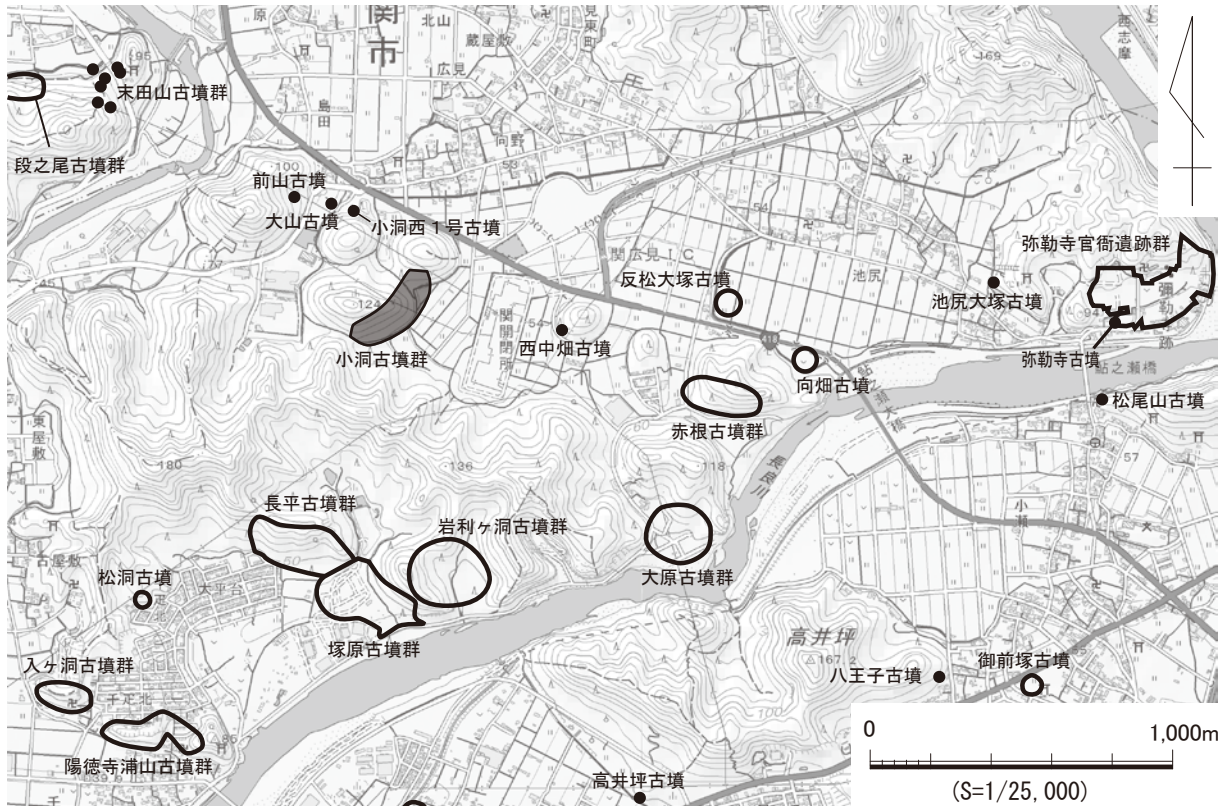


図1 小洞古墳群と周辺の古墳

(平成28年度国土地理院発行の2万5千分1電子地形図「岩佐」「岐阜北部」「美濃」「美濃関」を使用)



写真1 2号古墳石室(南から)



写真2 4号古墳石室(南から)



写真3 9号古墳石室(南から)



写真4 土坑墓(南東から)

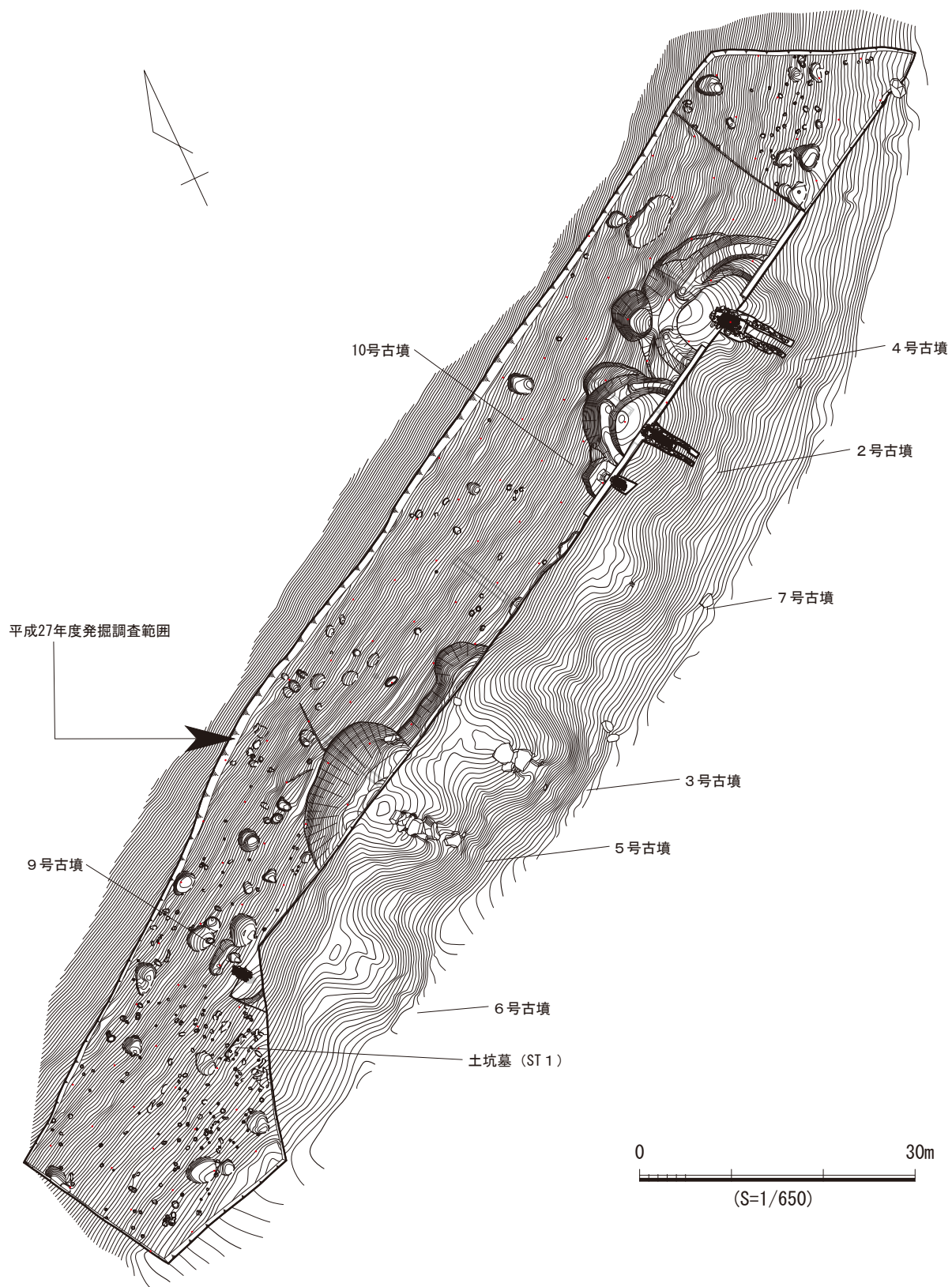


図2 小洞古墳群 遺構位置図

<参考文献>

岐阜県文化財保護センター2019『小洞古墳群』岐阜県文化財保護センター調査報告書第142集
 関市教育委員会2017「17 小洞古墳群 第1次調査」『関市市内遺跡発掘調査報告書』関市文化財調査報告第38号

関鍛冶発祥の地・古町遺跡

関市文化財保護センター 伊藤

古町遺跡は関市の中心部にあり、独立丘陵の安桜山と長良川の支流・津保川に挟まれた台地上に位置します。東側には関川が南流し、対岸には中世に関鍛冶職の惣氏神として信仰を集めた春日神社が所在します。

関市の観光拠点施設「刃物ミュージアム回廊整備事業」が計画されたことに伴い、試掘調査を実施した結果、中世の遺構・遺物が発見されたため、発掘調査を実施することになりました。遺跡名の「古町」は、昭和27年まで当地で使われていた地名です。

発掘調査の結果、室町時代の鍛冶作業に関連する遺構・遺物を発見しました。炉跡や焼土を含む土坑が多数重なって検出できました。炉の火力を高めるための送風装置であるフイゴの羽口や炉の底に溜まって出来る椀型滓が計約160kg出土したことから、鉄を溶かす作業が繰り返し行われたことが分かります。

金床石や鍛錬の際、飛散した鍛造剥片や火花が空気中で冷やされてできる粒状滓も検出でき、鉄製品の加工を行っていたことが判明しました。刃先や茎部が欠失していますが、残存長18.5cmの短刀が出土したことから、刀鍛冶も行われていたと考えられます。その他に釘(建築資材)、のこぎり・ノミ・錐(工具)、よろいの小札や短刀(武具)が出土したことから、日本刀以外の鉄製品も製作していたと思われます。

また、鉄器製作(鍛錬鍛冶)のみならず、大型の炉跡が検出できたことから、鍛錬鍛冶の前段階である精錬鍛冶(純度が高い鉄の素材を取り出す)も行われていた可能性があります。

山茶碗、かわらけ、灯明皿、灰釉皿、鉄釉播鉢を中心とする瀬戸・美濃産陶器、常滑焼大甕、青磁碗、景德鎮の青花皿、銅が付着した取鍋(溶かした金属をすくって、鋳型に流し込むための容器)、砥石、銅銭など14～16世紀の陶磁器が17,000点以上出土しました。

これらの出土品は広域にわたる商品流通が行われ、人と物が集まる町として発展したことを示しています。

今回発見された古町遺跡は、中世の関町的一端を示していると言えます。文献史料では、関鍛冶は室町時代の応永期(1394～1428年)に各地の鍛冶が関に移住し成立したと考えられていることから、関鍛冶は「古町遺跡」の近辺を拠点に活躍したことが推測できます。

古町遺跡の発見により、中世の関町は、刀を鍛えることができる質の高い技術を備えた職人が刀鍛冶として集住したことにより発展し、また、各地の都市や農村に建築資材や工具、武具などを供給する鍛冶職人の町として広く知られていた可能性を具体的に考えることができるようになりました。

古町遺跡は、関鍛冶の起源や中世の関町を探る上で重要です。



炉跡
焼土

炉跡と周辺に広がる焼土



炉跡(下層)
炉跡(上層)

上下層で検出できた炉跡



炉跡B
炉跡A
下部構

長さ4mに及ぶ下部構造を備えた炉跡



灰土の塊

(炉の底に溜まった鉄くず)



2区西壁面から出土した短刀



1区
(万寿公園)

2区 (約40m×60m)

ファイゴの羽ロ小片 (円筒形で内部は空洞)

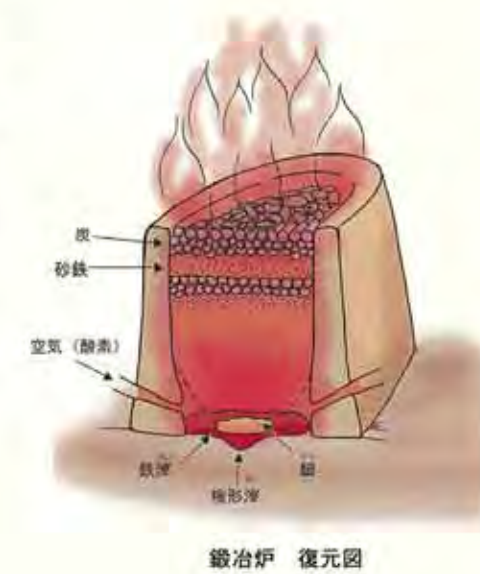


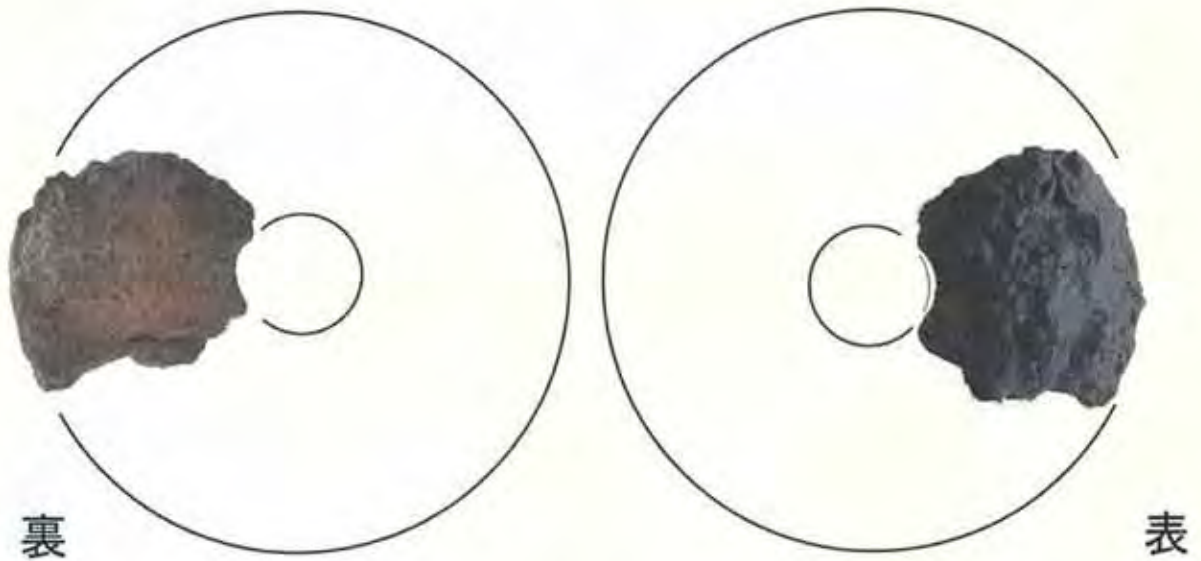
緑青が付着した取鍋(溶かした金属を入れた耐熱容器)

古町遺跡 本発掘調査 全景

川原石を多量に含む土坑







0 5cm

フィゴの羽口



金床石



多量に出土した椀型滓



0 5cm

2区から出土した短刀



古町遺跡出土鉄製品



古町遺跡出土鉄製品 (X線写真)

令和3年度岐阜県埋蔵文化財発掘調査実施一覧

通番	所在地	遺跡名	時代	種類	調査主体
1	岐阜市	岐阜城跡	中世	城館跡	岐阜市文化財保護課 岐阜市教育文化振興事業団
2	岐阜市	芥見町屋遺跡	古代 中世	散布地	岐阜県文化財保護センター
3	高山市	松倉城跡	中世	城館跡	高山市教育委員会
4	多治見市	大針11号古窯跡	古代	生産遺跡	財団法人多治見市文化財保護センター
5	多治見市	大沢10号・11号・14号古窯跡 北小木大谷洞25号古窯跡	中世	生産遺跡	財団法人多治見市文化財保護センター
6	多治見市	北小木小松針1号古窯跡	中世	生産遺跡	財団法人多治見市文化財保護センター
7	関市	弥勒寺官衙遺跡群	弥生 古代	官衙跡	関市文化財保護センター
8	関市	落洞1号古墳	古墳	古墳	関市文化財保護センター
9	関市	大杉西遺跡	縄文 弥生 古墳 古代 中世 近世	集落跡	関市文化財保護センター
10	瑞浪市	釜戸上平遺跡	縄文 中世	散布地	岐阜県文化財保護センター
11	恵那市	毘沙門遺跡	縄文 古墳 中世	散布地	岐阜県文化財保護センター
12	各務原市	鷺沼古市場市場	縄文 弥生 古墳 古代 中世 近世	散布地	各務原市埋蔵文化財センター
13	可児市	柿田西遺跡B地点	弥生 古墳 古代 中世	集落跡	可児市文化財課
14	可児市	柿田西遺跡C地点	弥生 古墳 古代 中世	集落跡	可児市文化財課
15	可児市	柿田西遺跡D地点	弥生 古墳 古代 中世	集落跡	可児市文化財課
16	可児市	柿田西遺跡E地点	弥生 古墳 古代 中世	集落跡	可児市文化財課
17	可児市	柿田西遺跡G地点	弥生 古墳 古代 中世	集落跡	可児市文化財課
18	可児市	柿田遺跡	弥生 古墳 古代 中世	集落跡 その他の遺跡	岐阜県文化財保護センター
19	養老町	明德遺跡	弥生 古墳 奈良 中世	散布地	岐阜県文化財保護センター
20	養老町	千人塚1号古墳	古墳	古墳	養老町教育委員会
21	大野町	六里遺跡	縄文 弥生 古墳 古代 中世 近世	散布地 集落跡 その他の墓 生産遺跡	岐阜県文化財保護センター
22	大野町	野古墳群	古墳	古墳	大野町教育委員会
23	大野町	亀山古墳	古墳	古墳	大野町教育委員会
24	御嵩町	願興寺廃寺跡	奈良 平安 中世 近世	社寺跡	御嵩町教育委員会